

指定物件調書

1 種別及び名称

(種別) 無形民俗文化財

(名称) 米野木お馬頭 (おまん)

2 所在の場所 (地域)

愛知県日進市米野木区内

3 保持団体の名称及び住所

(名称) 米野木お馬頭保存会

(住所) 愛知県日進市米野木町仲田 72 番地

4 概要

(1) 由来・沿革

米野木の「お馬頭 (おまん)」行事は、尾張と西三河を中心とした地域で盛んに繰り広げられてきた、飾り馬を主体とした祭礼行事である。「おまんとう」「うまのとう」とも呼ばれ、「馬の頭」「馬の塔」と表記されてきた。それに対し格式の異なる行事が「合宿」や「合属」であった。これら市域の氏神の祭礼などで繰り広げられる、飾り馬を繰り出す「馬の頭」の行事と猿投神社への合属は、それぞれ別の造り物である標具を鞍上へ飾った。また雨乞いなどの願掛けと願済でも異なる標具を使用した。

猿投合属の南尾張合属に属した日進市域では、その代表ともいえる先導 (端) という立場であった米野木が、明治時代の終わりに任務を辞退することになった。このように時代とともに祭り行事を執り行う環境が激変する中で、一時途絶えていた米野木では「お馬頭 (おまん)」と呼ぶ行事を昭和 53 年に復活させた。それ以降、郷土で培われてきた「お馬頭 (おまん)」と「合属」、これら両者の伝統を後世に伝えるべく、10 月に開催する氏神の祭礼で再現し現在に至っている。

(2) 猿投合属と米野木お馬頭 (おまん)

馬を神に献じて祈願することは、古くから全国各地で行われてきた。例えば平安時代中期の法典「延喜式」に、黒毛は祈雨、白毛は祈晴のために献じることが記されている。また、馬が走る様を神意だと受け取った先人は、その結果を神の声だとした。そのため神社の祭礼では、馬が主役となる走り馬や流鏝馬などの神事が人気を呼んだ結果、人々に見せることを意識する風流の造形も大いに発達するのである。

お馬頭 (おまん) よりも大がかりな飾り馬の行事が「合宿」「合属」である。それは猿投神社 (豊田市) や熱田神宮 (名古屋市熱田区)、さらに龍泉寺 (名古屋市守山区) など地域の人々からも多くの信仰を集めた社寺へ、集団を組織し厳格な仕来りにならない警固の隊列を整えて献馬する行事であった。特に鞍上の標具の造り物は地域のシンボルであるとされ、その雛形を絵図に写し厳重に管理がされていた。そこに記載された内容の形状と少しでも異なると、祭礼行事が滞るだけでは済まなかったという。その猿投合属に出す標具は地域の祭礼である「馬の頭」行事で使うことはなかつ

たようである。このような馬を主役とする行事に、遠方でも献馬するため日進市域の村々から出かけたのは、猿投神社と熱田神宮に対しての行事であった。

熱田神宮への当地域から献馬は不定期であるが、前者の猿投神社は年中行事になっていた。それが旧暦9月8日と9日に開催された猿投合属である。この行事には12合属と1流鏑馬村が昼夜問わず2日間に亘り、多い時には186か村が決められた標具を馬の背に装着し、次々と献馬のため警固の行列を仕立て参詣したのである。

日進市域の旧藩政期に存在した村々は南尾張合属に属し、猿投神社境内への入場は11番目の9日午後に予定されていた。その範囲は現在の日進市域だけでなく長久手市、東郷町、みよし市、豊田市などを含めた28か村であった。また「米野木合属」とも称したのは、米野木村が先導（端）と呼ばれる中心的な役割を担当したからである。

豊田市に鎮座する猿投神社は由緒ある三河国の三宮であった。他に尾張からは現在の瀬戸市と尾張旭市の地域が参加した北尾張合属（山口合属）も存在した。このような合属が何時から始まったかは定かでないが、岩崎地域が所蔵する元和2年（1616）起しの「猿投祭禮記録」にある「猿投祭り出始メ之覚」が参考になる。天文22年（1553）に岩崎村と本郷村の2か村が猿投神社の祭礼に初めて参加した以降、慶長19年（1614）までに南尾張合属の村々が加わった年代の経過が記されている。このように、年を経るに従い参加する村数が増えていったことは、猿投合属の始まりが一度に成立したのではなく、時代と共にさまざまな規則が整備され、徐々に組織化されたことを物語るものである。

尾張藩士であった高力猿猴庵種信（1756～1831）は『尾張年中行事絵抄』に、

（前略）傳へて云、此馬の頭、往じ元禄の頃までハ合宿といふ事もなく、又、三河・美濃あたりも一時に馬を出して、彼社ニ集る故、数万人にて喧嘩口論たへざりしとかや。されバ其頃より順を正して、今の如くなれりとかや（後略）

と記述する。すなわち、元禄年間（1688～1704）の頃までは合宿という規則がなく、多くの地区から勝手に参集するので喧嘩口論が絶えなかった結果、組織化されたというのである。さらに浅田の浅井家所蔵の「萬覚帳」寛政10年（1798）条には、標具が出来たのが「八十四年巳前ニ出申、寛政十年午之年又改出申候」とあり、それは正徳4年（1714）であり、先の猿猴庵が記した元禄年間云々という話にも年代的には符号することである。

飾り馬の行事である「馬の頭」や「合宿（属）」などは、江戸時代まで盛大に繰り広げられてきたが、毎年、必ず行うという行事ではなかった。猿投合属の場合は猿投神社から要請が米野木にあり、さらに小集団の四端と呼ぶ世話地区などとの協議により、参加への可否を決めたのだという。行事当日は、徐々に集団を膨らませていくた

め、出合と呼ばれる挨拶儀礼を繰り返し、隊列を整えて猿投神社を目指して進んだという。このように厳粛な規則に従って展開されていた合属など飾り馬などの行事も、明治新政府の時代になると禁令が出されている。それは明治6年(1873)の太政官布告による愛知県布達で馬之塔と棒の手の奉納が禁止され、ようやく明治12年8月7日付の布達により解かれるのである。しかし、この5年余りの禁制は大きな打撃となり、同様な行事が元の盛況な状態に戻ることはなかった。

猿投合属は明治時代になると満足に行われることは少なく、さらに先導である米野木では明治28年(1895)に騒動が起き北と南に分裂するなどの変化が生じてきた。その結果、南尾張合属は米野木北組の名義で執り行うことになったが、明治43年(1910)になると北組は先導の辞退を申し出、保管している「猿投祭禮馬纏目録」を放棄したが、次の責任ある地域も受け取りを拒否したので岩崎が預かることになり、現在に至るのである。それから初めての合属が大正6年(1917)に開催されたが、怪我人も出たこともあり二度と行われることはなかった。

(3) 米野木お馬頭(おまんと)の標具

馬の鞍上に飾る造り物は前に紹介したように「ダシ」と呼び「標具」と表記する。それは神が降臨する依り代でもあり、江戸では部分名称であった「出し」が、曳山の全体名称として呼ぶようになり、明治になると全国共通語として国語辞典の項目に「山車」が採用されることになるのである。

お馬頭(おまんと)の標具は飾り馬具の部分名称で、その造形には御幣や高札、造花や大団扇、さらには人形など多彩な造り物の風流を見ることができる。それは地域内で展開する郷祭りや猿投合属、さらに祈願と願済では異なる標具を出したのである。米野木での郷祭りにおける標具は八つのシマによって異なっていた。その多くは高札やバリンと呼ばれた花枝で飾ったものだった。バリンは現在でもお馬頭(おまんと)の行事に使用されている飾りであり、割竹を鞍に片側12本ずつ24本を扇上に立て、それに色紙を上から水色、赤色、黄色、緑の順に巻くものである。その花枝は祭りが終わると希望者に配布され、家に持ち帰って護符にするのである。

猿投合属用の標具は三つの的が縦に連なり、その左右へ矢を添えたものである。他に三つ縦にある的の内、一番上の的だけは四角形の的を置く事もあった。その◇の的は流鏝馬用であるが、米野木内の北と南の組がよく争いごとをするので、変更したのだといわれている。さらに鞍の周囲を飾る標具巻には南尾張合属の先導であった関係から金糸で「尾州」と刺繍されている。

(4) 米野木お馬頭(おまんと)行事

①かつての「お馬頭(おまんと)」行事

米野木の氏神祭礼でいつから馬が出されたのかはつまびらかではない。米野木には「天文十年二月二日(朱書)三郎」「花押(朱書)三郎」と記された鞍が残されている。この天文十年のほか、慶長二十年、寛永十九年、寛文七年、寛文十二年、元禄二年と記される鞍も保管され、ほとんどのものは黒漆塗りで前輪と後輪の中央に紋が施

されている。これらの鞍が当初から米野木お馬頭（おまんと）で使われていたのかどうかは分からない。岩崎に伝わる「猿投祭り出始め之覚」によると、米野木が猿投合属に参加したのは天正3年（1575）が最初である。

米野木の氏神は神明社である。猿投合属が旧暦9月9日に行われていた頃の祭礼日は9月19日で、湯立神楽とお馬頭の行事を行ったという。それが10月15日に変更され、このときに米野木の八つのシマ（寺島、西浦、東中、西川、向山、川原、小原、柿ノ木）からそれぞれ飾り馬を出し、お馬頭（おまんと）行事を行なってきた。この神明社でのお馬頭（おまんと）には、シマを代表とする馬8頭の他、個人でも馬を参加させたので、多い時は12～15頭くらい出たのだという。島の馬は「役馬」、その他は「願馬」と呼んだ。かつて馬は米野木地内に7頭くらいおり、残りは他から借りてきた。

かつての米野木お馬頭（おまんと）は、次のように行われた。

祭り当日は早朝、馬を借りてくると直に川へ垢離を取りに行った。馬を洗ったりする世話は青年会が担当した。多くの地区は天白川であったが寺島と西浦は別の所で水垢離をした。その場所には竹2本を立て注連縄を張り、柄杓で塩水を馬にかけた。それぞれシマでは馬宿があり、そこで飾り馬に仕立てたのである。馬宿と垢離取り場の間を7回行ったり来たりすることになっていたが、実際に宿へ戻ったのは3回で、最後に戻るのを入れると都合4回である。

神社鳥居の前で全部の馬が揃ってから小山になった境内へ上がっていった。それに子ども会の神輿が続いた。飾り馬は境内に上がると、本殿下周囲にある馬場を1周半回ってから、拝殿前の広場に青年会の者が集合し「お百度参り」をした。それから棒の手を奉納し、終わると1周半回ってから馬宿へ帰ったという。この行事で奉納された米野木の棒の手はシマ毎でなく、青年会で一つの組織であった。他に米野木では昭和12年まで夏祭りの天王祭でも、20歳以上の青年会に属した者が「お馬頭（おまんと）」を出していた。

このような伝統を受け継いだ「お馬頭（おまんと）」行事は、昭和20年までの太平洋戦争中に休止になり、その後、復活したが昭和25年頃には途絶えてしまった。それが昭和53年に新しい姿で復活したのである。

②現在の「お馬頭（おまんと）」行事

現在、米野木お馬頭（おまんと）は、氏神の神明社大祭（例祭）として10月第2日曜日に行われている。当日は長久手市岩作の川長畜産から借りてきた2頭の馬を薬師寺で支度する。それぞれ標具で飾りつけてから水垢離の後、午前7時30分、東と西の献馬隊に分かれて回祝（かいしゅく）するため献馬隊に牽かれていく。午後1時30分になると、米野木神明社鳥居前へ東西ともに到着後、出合の挨拶をすると境内に馬とともに警固隊は参入するのである。ところで、献馬隊の西と東では襷と鉢巻の色を別にしており、黄色は東組、桃色は西組の献馬隊が使用している。馬の標具は東組が三的の左右に矢、西組は金の玉に流鏑馬用の的である。

令和4年の祭礼行事は以下のとおりであった。

(垢離取りと回祝)

夜もまだ明けない日曜日の早朝、関係者が長久手市岩作の川長畜産まで出向き、2頭の馬をトラックに乗せ米野木まで連れてくる。献馬隊の隊員は、祭り前の9月の日曜日ごとに川長畜産まで出かけて調教をしながら、馬との呼吸が合うようにする。当日の馬宿は薬師寺で、その境内には竹と注連縄で馬を納める場所を作り、ここから天白川までを何度か往復し垢離取りをする。まず裸馬で出かけ、馬が慣れてくると標具を取り付けていくのである。垢離取り場には2本の竹を立て注連縄を張り、川の水を形式的にかけている。以前は河原まで降りたという。

垢離取りが終わると2頭の馬は東と西に分かれ、地域内を回祝するため、予定されたコースを順に廻っていくのである。その出発は午前7時30分に馬宿の薬師寺からで、それぞれ地域の役員や希望者の家などを、馬と共に献馬隊が訪れていくのである。午前9時頃には一度、東と西を回祝している献馬隊が中央公園で集結し、しばらくすると再びそれぞれ担当する地域内を廻る。最終的には午後1時30分頃に神明社前へ県道の東西から献馬隊が駆けつけることになっている。回祝で馬が家に訪れると縁起が良いとあって喜ばれ、祝儀を出してくれるという。

回祝する時に東と西は、それぞれ次の標具を馬へ取り付けている。東は米野木伝統の猿投合属の際に出した三つ的に矢、西は流鏑馬の的に鳥毛である。東西の区別は先にも紹介したように鉢巻と褌の色で違いが分かるようにしており、東は黄色、西は桃色である。東西の献馬隊には、それぞれ先頭は左手に丸い弓張提灯、右手には日の丸扇を持った代表の祭事係、その後を警固隊が続くのである。馬の左右には口取り、その後方には2本の後綱を伸ばし、さらに馬の前に鉄砲(火縄銃)や団扇、馬の後方には槍や鎌を持った者が加わっている。

(神社への献馬口上と早駆け、お百度参り)

午後1時30分頃、回祝を終え近くで待機していた東と西の献馬隊は、左右から「ワッサイ」の掛け声も賑やかに、神明社前にある鳥居の前まで駆け集まってくる。鳥居に向かい右は東、その左は西の献馬隊が到着する。神社側から土器の盃で御神酒を頂くと、しばらく待機する。神明社境内中ほどにある社務所から、祭事係2人を先頭に区長と氏子総代合わせて4人が、左手に弓張提灯、右手に閉じた扇を持って階段右にあるスロープ状になっている坂より、警固隊が待ち構えている鳥居前まで降りていく。祭事係の衣装や褌と鉢巻の色は献馬隊と同様である。

鳥居を結界として外側に祭事係2人、その内側には氏子総代と区長が立ち献馬隊と対面する。すると鳥居前の1段低くなった所へ東西の祭典係が進み出て蹲踞する。その2人の祭典係は広げて右手で要を握っていた日の丸扇を閉じ、左手で持った弓張提灯を前に置き、低頭して三つ指と左膝を地につき右膝を立て、次の口上を代表で東の祭典係が述べるのである。

「本日の祭礼は天気でおめでとうございます」「本日は祭りを祝って、朝より区内を回祝して、ただいまこのように献馬 2 頭を若衆とで、献上に参りました」「よろしくお引き回しお願いいたします」

このように献馬隊の祭典係がいうと、向かい合っていた東の祭事係が蹲踞したまま、次のように答える。

「ご苦労さん」「本日の祭礼は天気でおめでとう」「みなさんの申し入れを喜んで、お上に伝えます」「しばらく、お待ちください」

このように受け応えた東の祭事係は、西の祭事係と共に立つと反対方向に向きを替える。両者は弓張提灯を持ち立ったまま、鳥居の前で見守っていた氏子総代へ先と同様に東の祭事係が次のように伝える。

「本日の祭礼は天気でおめでとうございます」「只今このように若衆が献馬 2 頭を、子供衆が神輿 4 輿と獅子頭を献上に参りました」「よろしくお引き回しお願いいたします」

これを聞いた向き合う氏子総代長は、次のように答える。

「ご苦労さん」「本日の祭礼は、天気でおめでとう」「皆さんの申し入れを喜んでお受け致します」

これを聞いた 2 人の祭事係は向きを替え、ともに先のように蹲踞して東の祭事長の許しが出たことを、次のように伝えるのである。

「只今下知がありました」「よろしく献上願います」

これを言い終えると直ぐに立って向きを替え、氏子総代、区長、東の祭事係、西の祭事係は 1 列になって元来た坂道を登り社務所へ帰っていく。

先の口上を東の祭事係が述べている間、献馬隊は後方で見守っており、終わると東の献馬隊から順に坂を駆け上り、境内広場下の馬場まで来ると左へ曲がって、時計回りに東西の献馬隊は 1 周するのである。この神明社境内には社殿の周囲を取り囲むように、祭事に馬を駆けさせる馬場が存在する。馬の後には子ども会の神輿なども坂を上がり境内の社殿前広場までいく。これで正式な標具による献馬は終わり、献馬隊は子ども会の神輿とともに境内の広場に揃うと神事が始まる。玉串奉奠の後に東西の献馬隊は馬場の裏まで揃って駆けていくのである。

その馬場奥では神事の中に次の「早駆け」の準備を急ぐのである。この早駆けをする時の標具は「バリン」と呼ばれる、先の標具とは別の飾り物に取り替えるためである。それは竹を割った枝を裏表 12 本ずつ 24 本立てたもので、上から水色、赤色、黄色、緑色の色紙を巻くのである。早駆けは東西とも馬場を口取り 2 人だけで走り回る行事である。東と西は順に何回か走るのであるが、この時は「馬に寄りかかって人馬一体になって走らないと危険だ」と言われている。

早駆けが終わると次は「お百度参り」である。馬場から東西の献馬隊が社前の広場に駆け込み、東と西が並び 2 列となって「ワッサイ」の掛け声を繰り返しながら走り廻り、3 周すると拝殿に通じる階段を上り拝礼しながら賽銭箱に小銭を投げ入れ、また広場へ駆け下りていく。この境内 3 周と拝殿での拝礼を 7 回繰り返すので、合計すると 21 周境内を廻り、さらに拝殿への階段を 7 回上り下りするのである。そのため事前に参加者は賽銭を 7 枚懐に入れておくのだという。以上が令和 4 年の米野木「おまんとう」行事の概要である。

(3) 参考となる事項

愛知県では尾張と西三河で、「おまんとう」「おまんとう」と呼ばれる祭礼行事が、多くの地域で行われてきた。それを「馬の頭」または「馬の塔」と表記し、もとは熱田神宮における馬の頭人の行事から発生したのだという。その馬の頭の行事では、神の乗り物である馬に豪華な馬具を装着し、土地の人々が集団で神仏に参詣した。その目的は地域の安穏を神や仏へ雨乞いや日乞いなどを祈願したのである。そして、御鋤祭や御札降りなど臨時的な祭礼における奉納行事でも登場させ、さらに個人の願掛けのために出すこともあったのである。

その飾り馬の行事では、馬の鞍上へ「ダシ」と呼ばれ「標具」と表記する、造り物の風流で飾り、その風流の造り物は人々から注目されていた。このような飾り馬の行事は、日進市域では江戸時代から存続した 10 近世村と、そこから生まれた 4 新田、すなわち市域全ての氏神の祭礼において実施していた祭礼行事である。しかし、現在も日進市域で氏神の祭礼に「お馬頭（おまんとう）」として飾り馬を出しているのは、米野木だけである。

(4) 評価

米野木のお馬頭（おまんとう）は、愛知県の尾張から西三河地域に広く分布した、いわゆる馬の頭と呼ばれる飾り馬の習俗を伝えるものである。その中でも多くの地域が厳格な規則に従って献馬した合宿や合属の内容も含まれていることに特色がある。それは米野木を含む日進市域は熱田神宮への合宿と猿投神社への合属、これら両者の祭礼行事に関与していたことから、独特な民俗行事としての伝統が伝えているのである。同様な行事は「愛知のおまんとう」として国から平成 16 年に記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されている。それは地域を特定しないとされていることから、「米野木お馬頭（おまんとう）」の伝承も、それに該当する文化財なのである。

「米野木お馬頭（おまんとう）」では、東と西に分かれ飾り馬を仕立てた献馬隊が、

それぞれの地域内を廻った後、社前で合流すると出合の口上、そして境内へ参入し社殿の周りにある馬場を駆けた後、それまでは猿投合属用の標具であったものを、竹花を挿して飾った「バリン」に取り替えて馬場を馬と口取り2人だけで走る「早駆け」を行った後、献馬隊は東西2列になって境内を回りながら社前へ行って参拝する「お百度参り」で終えるものであり、このような米野木独特の祭礼行事内容を伝えていることは注目すべきことである。なかでも度々登場する「本日の祭礼は、天気でおめでとう」という口上言葉は、かつては地域の祭礼でも若い者が各家を訪れて述べたものであり、米野木の人たちに浸透した予祝的な言葉が反映されている。その仕来りはお合の口上の伝統も受け継ぐのである。

なお、現在の「米野木お馬頭（おまんこ）」は、一時は途絶えていたものを昭和53年に米野木消防団OBの活動により復活させ、子どもたちとの交流などを含む目的で始めた行事を、今に続けているものである。現在は、伝承組織として原則は米野木区民からなる「米野木お馬頭保存会」を結成し運営を行っている。中でも献馬隊は広く米野木在住の20歳から42歳の者を対象に参加を募集する。さらに次世代の子どもたちの参加につながるよう、地域内の小学校へ「お馬頭（おまんこ）」の出前授業を郷土学習の一環として実施している。

「米野木お馬頭（おまんこ）」は、その伝統だけでなく後継者育成も含め、今後への取り組みも積極的に組織で活動していることから評価できるので、日進市の無形民俗文化財として相応しい、後世まで伝えていかねばならない祭礼行事である。

祭礼の様子① 支度・垢離取り



祭礼の様子② 集会の様子と回祝の準備



祭礼の様子③



回祝の様子 1



祭礼の様子④



回祝の様子 2



祭礼の様子⑤ 中央公園集合後、 神明社を目指し回祝



祭礼の様子⑥ 献馬口上と境内へ向かう様子



祭礼の様子⑦ 境内集合後、玉串奉奠



祭礼の様子⑦ 早駆け・お百度参り 1



祭礼の様子⑧

お百度参り 2





馬具の保管場所
(米野木神明社 社務所)

保存の様子



東



だし
標具



うまくら
馬鞍



東



おもがい
面繫



くびよろい
首鎧



あとづな
後綱



おながれ
胸繫

東



しりがい
鞆



あおり
障泥



だしま
標具巻き



しりだおい
尻駄負

西



だし
標具



うまくら
馬鞍

西



おもがい
面繫



くびよろい
首鎧



あとづな
後綱



おながれ
胸繫

西



しりがい
鞆



あおり
障泥



だしま
標具巻き



しりだおい
尻駄負

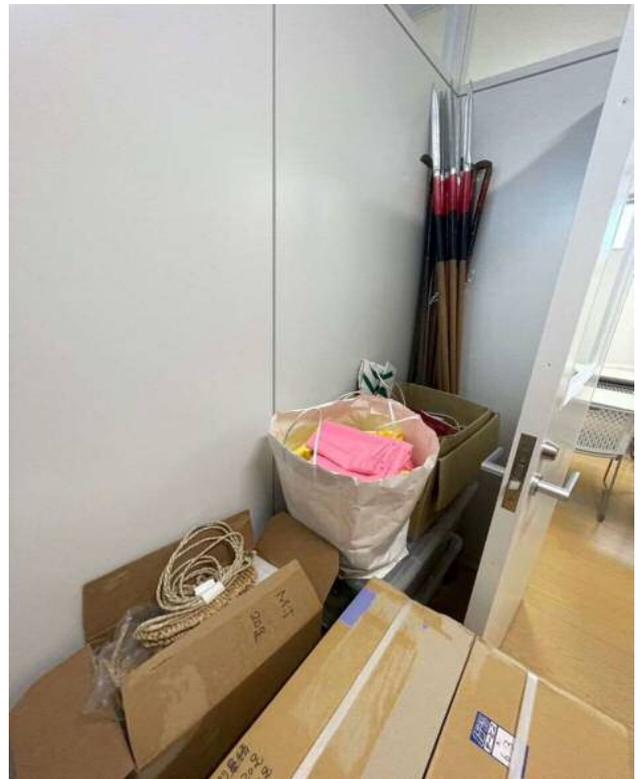


バリ

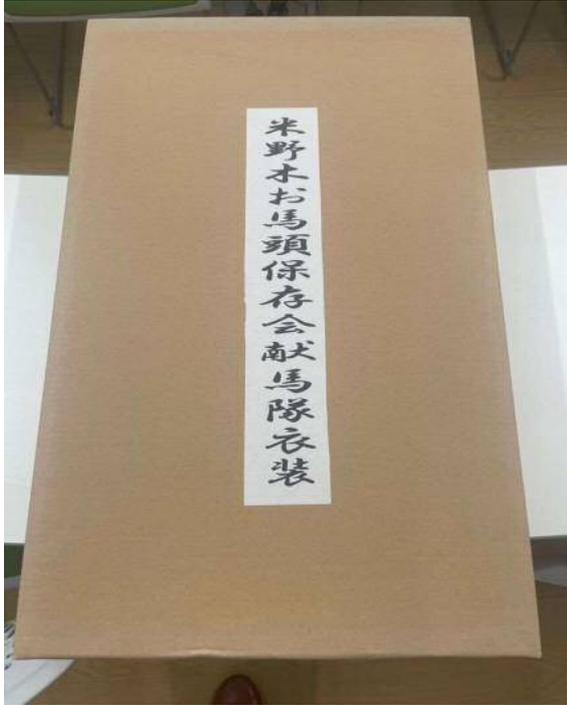


祭礼の衣装・小道具の保管場所
米野木区民会館

保存の様子①



保存の様子②





じんがさ
陣笠



はんてん
半纏



てこう
手甲

おび
帯



ももひき
股引



きゃはん
脚絆



わらじ
草鞋



かざきり (かたきり)
風切





やり 槍
かま 鎌
ぼう 棒



おおうちわ
大団扇



せんす
扇子



ちょうちん
提灯



てっぽう
鉄砲